2012年の日本の漁獲量は、21.8万トンであり、２年連続で20万トンを超えた。

資源水準は、過去のＣＰＵＥ（１操業当たりの漁獲量）との比較において、中位水準にあると判断される。また、資源量は過去５年間（2009年～2013年）で減少と増加を繰り返していることから、動向は横ばいと判断される。

⑵　すけとうだらの動向

我が国周辺水域のすけとうだらは、北海道周辺及び東北沿岸に分布しており、生息域の分布等によって太平洋北部に分布する太平洋系群、日本海北部に分布する日本海北部系群、オホーツク海に分布するオホーツク海南部及び根室海峡に産卵場を有する根室海峡の４つの評価単位に分かれている。この中で最も資源の大きな太平洋系群は、2005年級群が卓越年級群となり良い加入となったものの、その後に続く良い加入は確認されておらず、2013年の資源量は85万トンであり、２歳以上の資源量から資源水準は中位、過去５年間（2008年～2012年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。日本海北部系群は､2006年級群の良い加入があったものの､その後の加入は悪く、資源量から資源水準は低位、過去５年間（2008年～2012年）の資源量の推移から動向は減少と判断されるが、2012年級群の発生は良い模様である。オホーツク海南部は、資源量指数から資源水準は中位、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）の推移から動向は増加と判断される。根室海峡は、総漁獲量から資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑶　まあじの動向

我が国周辺水域のまあじは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別されるが、当該資源の分布域は資源状態により大きく異なり、両系群は一部水域において混在して分布している。太平洋系群及び対馬暖流系群の2013年資源量はそれぞれ４万トン、55万トンで、太平洋系群は、資源量から資源水準は低位、動向は減少、対馬暖流系群は、資源量から資源水準は中位、動向は増加と判断される。

当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑷　まいわしの動向

我が国周辺水域のまいわしは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別される。当該資源は､これまで数十年単位で大きく変動してきており､その資源状況によって分布域が大きく変化することが知られている。両系群とも1988年から1989年を境として漁獲量が大幅に減少し、近年は低い水準で推移してきた。

当該資源の状況は、太平洋系群は、2010年級群の加入が良く、資源量と親魚量から資源水準は中位、2013年の資源量は74万トンであり、資源量の推移から動向は増加と判断される。対馬暖流系群は、親魚量から資源水準は中位、2013年の資源量は24万トンであり、過去５年間（2008年～2012年）の資源量が増加傾向にあることから、動向は増加と判断される。

しかし、当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑸　まさば及びごまさばの動向

我が国周辺水域のまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群に、また、ごまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と主に東シナ海に分布する東シナ海系群に大別され、それぞれ両系群は一部水域において混在して分布している。全般としては、ごまさばは、まさばに比べ南方域に分布しているが、近年、太平洋では北海道沖合まで分布がみられている。

資源の状況は、まさばは、太平洋系群の資源水準は資源量と親魚量から中位、2004年・2007年・2009年と豊度の高い加入があり資源量は2013年167万トンで、資源量と親魚量の推移から動向は増加と判断される。対馬暖流系群の資源量は2013年65万トンで、資源量と親魚量から資源水準は低位、動向は過去５年間（2008年～2012年）の資源量が横ばい傾向にあることから、横ばいと判断される。ごまさばは、太平洋系群の資源量は2013年99万トンで、漁獲量と1995年以降の資源量の推移から資源水準は高位、2008年以降の資源量の推移から動向は増加と判断される。東シナ海系群の資源量は2013年15万トンで資源量から資源水準は中位、動向は増加と判断される。

まさば及びごまさばは、共に新規加入群の状況によって変動が大きいことから、資源動向について今後とも注視する必要がある。

⑹　するめいかの動向

我が国周辺水域のするめいかは、日本近海に広く分布し、季節により南北に大きく回遊するが、主に12月～３月に東シナ海で発生する冬季発生系群と、10月～12月に北陸沿岸域から東シナ海で発生する秋季発生系群とに大別される。

資源の状況は、資源量をみると、冬季発生系群は、2013年で65万トンであり、資源尾数から資源水準は中位、過去５年間（2009年～2013年）の資源尾数の推移から動向は減少と判断される。秋季発生系群は、近年中位～高位水準であり、2013年は115万トンとなり、資源量から資源水準は高位、過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は減少にあると判断される。

当該資源は、海洋環境によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑺　ずわいがにの動向

我が国周辺水域のずわいがには、日本海大陸棚の縁辺部、大和堆、銚子以北の太平洋岸及びオホーツク海の水深150メートル～750メートルの範囲に分布し､生息域の分布によって､オホーツク海系群、太平洋北部系群、日本海系群及び北海道西部系群に分けられる。資源の状況をみると、この中で最も資源の大きな日本海系群は、富山県以西（Ａ海域）では1990年代後半から資源は回復傾向にあり、資源密度指数から以前は低位であった資源水準が中位に回復した。2009年以降の資源量の推移から、資源動向は横ばいと判断される。新潟県以北（Ｂ海域)では、資源密度指数の５年移動平均から資源水準は高位、資源量の推移から動向は横ばいと判断される。また、オホーツク海系群は、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）から資源水準は低位で動向は分布密度の推移から横ばい、太平洋北部系群は、資源量から資源水準は中位で動向は減少、北海道西部系群は、ずわいがにかご漁業のＣＰＵＥ（１かご当たりの漁獲量）から資源水準は高位で動向は増加であると判断される。

２　第２種特定海洋生物資源ごとの動向

⑴　日本海西部海域のあかがれいの動向

日本海西部海域のあかがれいは、当該海域の水深150メートル～900メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のあかがれいを主として漁獲する沖合底びき網漁業の漁獲量は､データが揃っている1991年以降の新潟県以西の漁獲量をみると、1995年頃まで増加を続け、その後は3,000トン台で安定していた。漁獲量や沖合底びき網漁業の資源密度指数の推移から動向は横ばい、2012年の漁獲量は近年の最高値であった2011年の6,158トンよりやや減少したものの5,800トンであった。しかし、沖合底びき網漁業のみで5,000トン以上漁獲していた1980年代前半と比べると、沖合底びき網漁業の資源密度指数は低く資源水準は依然中位であると判断される。

⑵　宗谷海峡海域のいかなごの動向

宗谷海峡海域のいかなごは、当該海域の水深40メートル～80メートルに分布している。当該海域の近年のいかなご類の漁獲量は1995年の56,000トンをピークに減少傾向にある中で、2012年は前年を大きく下回り、1980年以降で最低の3,000トンに減少した。

資源状態の指標である沖合底びき網漁業の過去のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）の動向や近年の漁獲物体長組成などから資源水準は低位で、動向は減少と判断される。